

「年少者のための日本語教育」フォーラム  
 2009年8月22日(土)  
 午後2時～4時  
 香港日本文化協會日本語講座・中環干諾道中19-20號馮氏大廈1字樓  
 香港日本語教育研究會副會長阮亦光先生  
 司會者

	<p>蘇凱達先生 (順德聯誼總會翁祐中學)</p> <p>*学校は2000年に成立された。翌年9月から日本語が必修科目として教えられた。          *蘇先生は中学校の正規教員である。日本語課程の授業からコースの発展まで一人で担当している。また、日本語のほかに歴史も教えている。          *中学1年～3年生は必ず日本語を勉強する。          *高校生(中学4年生～)では趣味科目として日本語が勉強できる。授業は放課後や週末、長い休みなどの時間を利用して個別指導の形で行われる。</p>	<p>梁翠碧先生 (耀中語藝教育中心)</p> <p>*センターは英語、北京語、日本語とスペイン語等の課外語学コースを行う。          *日本語生徒は主に小中学生である。          *子供の日本語コースは2002年から提供された。</p>	<p>盧丙華先生 (惠僑英文中學)</p> <p>盧さんは「第一日語」の先生であり、2年前「惠僑英文中學」へ派遣された。</p>	<p>譚俊傑先生 (新亞中學)</p> <p>譚さんは「日本語講座」の先生であり、07年に「新亞中學」へ派遣された。</p>	<p>曾燕珊先生 (民生中學)</p> <p>曾さんは「日本語講座」の先生であり、07年に「民生中學」へ派遣された。</p>
<p>現状</p>	<p>30~40名</p>	<p>10+クラスで、1クラス5~10名。</p>	<p>5クラス編成(中学1年~3年生に向き)。1クラス20名。</p>	<p>2クラス編成。1クラス20名。</p>	<p>2クラス編成。1クラス20名。</p>
<p>勉強時間</p>	<p>一サイクルで1時間、年間約25時間。</p>	<p>*週に一回、毎回は1時間~2時間まで。          *年間40~60時間。</p>	<p>*週に一回、毎回1時間20分。          *年間約30時間。</p>	<p>年間20時間          *週に1回、毎回1時間</p>	<p>*年間20時間          *週に1回、毎回1時間</p>
<p>テキスト及び教材</p>	<p>先生は自ら教材を編集する。</p>	<p>*「みんなの日本語」(香港版)を使う。          *日本語先生(日本人と香港人)も一緒に適切な教材を探したり、作ったりする。          *優れた読本やCD、Worksheetなどを採用する。</p>	<p>市販教材を使う。</p>	<p>「GoGo日本語」(日本語講座から編集したもの)と「聴聴説学日語」</p>	<p>*「GoGo日本語」テキストと練習帳。          *曾先生は自ら写真やスナックラベルなどを用意する。</p>
<p>教学内容</p>	<p>*中学1年生は主に基礎な日本語(例えば数字、仮名、漢字、発音、日常よく使う語彙、日常会話など)を学ぶ。          *2年生~3年生は主に文法と日中翻訳を勉強する。          *課程では読解練習を特に着眼する。それから聴解も日本語に対する認知能力が向上させる重要な手段である。          *高校生は高いレベルの日本語会話を学ぶ。ある程度の能力を持った生徒達には、蘇先生が相応しい認定試験試験にの申込みを手配してあげる。</p>	<p>*證書クラスには学力テストがあり、生徒は日本語の「聞く、読む、話す」と書くなどの練習を受ける。          *就学前の児童は「唱遊クラス」へ参加することができ、主に日本語の聞くと言話を勉強する。          *センターは時々日本文化活動を行う。          例：東京ツアーや茶道見学など。          *授業のなかに日本の挨拶や簡単な会話を教える。</p>		<p>*初級クラスは主に50音、平仮名、片仮名と挨拶を勉強する。          *中級クラスは日本語文法(自動詞や他動詞)を中心に勉強する。</p>	<p>*「GoGo日本語」は全部8章があり、目標として、2時間で1章を教える。          *教学内容は主に50音、平仮名、片仮名、単語、挨拶と日本文化である。</p>

	蘇別達先生 (順德聯誼總會翁祐中學)	梁翠碧先生 (耀中語藝教育中心)	盧丙華先生 (惠僑英文中學)	譚俊傑先生 (新亞中學)	曾燕珊先生 (民生中學)
<p>教學の問題点</p>	<p>*集中力の問題。 *学生に第二外国語の習得に対する興味を持たせること。</p>	<p>*就学前の児童は勉強の自発性や動機が弱い。</p>	<p>*盧先生は最初に子供や青少年を教えることに慣れてなかったため、不安を抱えていた。 *何の手段を使って、子供に日本語の習得に対する興味を持たせることと考えた。</p>	<p>*課程内容の決定に関して、先生の意見より学校管理職のほうが強い。 *譚先生は学校の正規職員ではないため、クラスを厳しく管理しにくい。 *学生の出席率が悪い、主な理由は： ①校内に他の課外活動や補習授業が多すぎる。 ②日本語クラスのみでない課外活動は先着順で生徒を決めるため、学習の動機が弱くてすぐ諦める生徒もいる。 ③学校は日本語科目より他の科目を重視する。</p>	<p>*生徒に対して、平仮名を書くのは難しい。また、片仮名がなかなか覚えられない。 *日本語クラスは放課後(午後四時ぐらい)に始まるから、学生はかななり疲れた。 *どういうふうにして学生の集中力を維持することと考える。</p>
<p>改善方策やアイデア</p>	<p>*幅広い種類の活動により、日本語の面白さや実用性を学生に伝える。 ①港日高校生交流会を開催して、香港の高校生が日本の高校生と交流することができるようになる。(1回の協賛機構が三菱商事と読売新聞で；2回目は日本の公立高校と共催する予定となっている。) ②「日本文化週」：浴衣の試着ワークショップ(在香港日本領事館から浴衣を提供)。学生が浴衣の姿で伝統的な日本舞踊を演じたり、「教盛」という有名な能を演じたりした。また、蘇先生は日本の折り紙コースや伝統的な玩具展示会を手配した。 ③毎年香港日本語教育研究会の主催している日本語スピーチコンテストに学生を参加させる。2009年度のコンテストでは、1年生の出場者に初めて賞が授与された。 ④蘇先生と一人の中学6年生は香港政府の教育局に選ばれて今年度の「21世紀東アジア青少年大使交流計画」(英: JENESIS Programme) を参加した。夏休みに日本へ9日間に訪問した。</p> <p>*学生の集中力を改善することについて、蘇先生は以下の意見を述べた： ①生徒のレベルに合わせて、適切なペースで日本語を教える。学生の達成感を大事にすること。 ②「先管後教」という方針を導入する。クラスの秩序を大事にすること。</p>	<p>*子供は日本テレビやPCゲーム、スマートフォンに興味がある。そのため、センターは活発なイベントで日本文化を紹介する。 *少人数の形で、きちんと生徒の需要に応じる。 *日本語先生はみんな大学卒で、子供に教えることが好きな方である。 *先生の教え方や慣し方も重要である。だから、時間があれば先生は子供心理学などの本を読むはずである。</p>	<p>*クラスに色々な工夫をして、積極的な雰囲気を出すことが重要である。 *日本語勉強について、生徒達の熱心な態度を促すため、流行っているものや共通の話題を通じて、授業をする。 *学生たちの好みや需要に応じて教える。 *先生は10代の子供に言葉の正しさや良さの重要性をきちんと伝えなければならぬ。 *学生の達成感を増やすため、生活用語などを教える。</p>	<p>*香港の青少年は日本のサブカルチャー(アニメ、PCゲーム、芸能人など)に大変興味を持っているから、日本文化に通じて日本語を教えるほうが効果が高いはずである。 *マルチメディアを更に活用する。例えば、YouTubeでの面白い動画を利用する。</p>	<p>*生徒は日本の食べ物やアニメ、歌にとっても興味がある。 *曾先生は生徒の興味と合わせて、日本のスナックラベルを使って、単語を教える。</p>
<p>他</p>	<p>*香港には趣味として日本語を勉強した青少年がけっこういるけど、大学に入って日本語を専門にするともう一度勉強しなければならぬ。検討会の参加者によって、大学はこのような一年生に対して、特別な入門コースを提供するはずである。 *次田亜紀子副領事は在香港日本総領事館の文化事業を紹介した。日本語を身につけるつもりで、子供が体験できるのが大事だと話した。そのため、領事館の広報文化部に連絡することができる。 *香港日本語教育研究会の例えは、学校に茶道、剣道、生け花と柔道などの先生を紹介したり、物品を借りたりする。興味がある学校は直接に広報文化部に連絡することができる。 *中学校日本語教育の普及までは道が長い。その理由：日本語は主流科目ではなくて、教学資源が少なくないのは現実である。また、優秀な学生達に対して、大学で医学や法律、ビジネスを勉強したい、別に日本語ができなくてもかまわない。</p>				